

特54

56

尾大編拾貳

第九編

霧 五 人 男

稲垣正年恒画圖



伊東專三編輯

精塘

東京圖書館			
新書門	37	部類函架號	冊

雲霧五人男第九編之序詞

此九編目の山猫三次が藤三お續いて伊三郎とお衰を殺す一段より三人の死靈が三人纏ひ

實の古を温て新しき怪談物がそろくくと又焼酎火の明みへ出掛さうなる流行の音羽

橋塘伊東專三

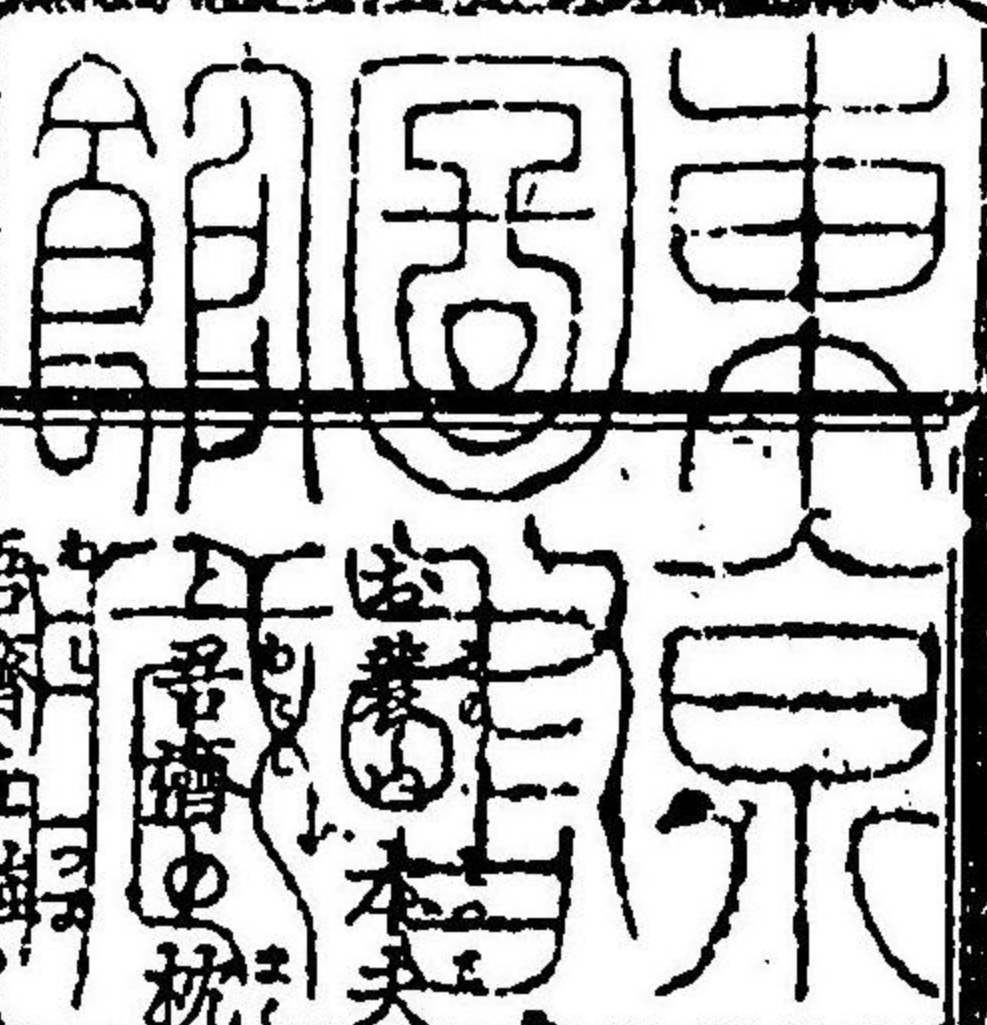
明治十七年八月二日御届 年十二月九日出版 定價金四錢

編輯人 伊東專三

出版人 吉場清藏

發兌元 東京金玉出版社

大賣捌 滑稽堂



第九編

夫婦生命脱落す凶事の夢占 怨愛非道を断ふ病床の縛繩

夫は打向ひサア其謀の外ならず長井の癖の藤三さんが血だらけに成り去よんなり

計らまねば片時も早く此所を退て終が上分別和女も今日の其心で店を休んで何故の事を
 と言はば養も承知なし正夢あれば藤三さん吾儕達の其爲に非業な最期をお遂なすつて可愛
 さうふと言うち其夜も己に明らうば妻の寢の下を焚附飯持へて本夫再寝せ随分共し用
 心しくと言はば本夫の心得く自己が家を立出つ先藤三郎の家へと行しが家ふり更し人影なけ
 れば四邊で聞は其所の主個の昨夜出さ切り歸らぬと言れ胸へざつくり来しかば誤りやと
 思ひ用地の沼の邊へ至るに彼所此所と見巡物うら夫どと思ふ物さへあらぬ思ひ返し昨夜
 の夢母藤三郎が重を掛て沈めらまたと言たる物を幾三度見るとも浮てをる可きや嗚呼我を
 がら魯ありと意附て其まふ行んとなし折しもあれ汀に繋る蘆の中より發と立たる
 群鳥羽音の高く飛行あると見るともあしに打見やれば重の落て流れ寄るか藤三の死骸の浮び
 あるふ伊三郎一目見より怒地氣も暮れ心も消え才、藤三殿の淡猿しい姿に成て下されたと
 涙ながら下立て死骸を岸に引上つ肩口といひ指といひ昨夜の夢母見た通り世母も無残お
 殺しやう是といふのも女房お養が危き所を助て下された其深切が害となり邪見を刃に掛
 つつと思へば濟ぬ夫婦の者言は吾儕等兩人が手に下さねど殺しとも全に様なる物である



母夫を恨とん思えをして特々夫婦が枕上へ立
 て危急を告て下すつ御恩の死でも忘ませ
 ぬ兩人茲を立退て何處の果母も身と落附れば
 和郎を以て先祖お祭り長く回向をする程母迷
 えを成佛しく下さき南無阿彌陀佛みだぶつと
 念じて泪母暮たりしか何まで斯て有るとん益
 おし責て死骸の見苦しき所を隠して上んも
 のと其所等を見せば誰が置忘れしる鉄の一挺
 ありたるに時に取すの僥倖と拾い取つ、其邊
 の土掘起し死骸を埋め印かかりの松を立猶も
 意ふ念やなご急ぎ足して我家へ歸り女房お
 養今日始末筒様くと語り聞け夢に見た
 ると寸分違ぬ死體が有らぬ如此と其所へ埋

戻りと言母お養の塵毛元より標とする程吃驚し且藤三の死を悼み悲嘆の泪み暮る
 がやうく〜に〜目と押拭ひ夢の五臓の勞れと言ど實に争えぬ今朝の正夢然いふ譯で
 新志代が吾儕夫婦を深くも憎み夢で報知く呉くやうみ殺す意で有らふも知ねば茲あるの
 の最々危し少し早く此所をといふを本夫の暫時と止め何道茲にありぬるまきば家財と
 片附晝日中立退たらば此邊に居る者の目も留るが最期直新志代母告うれて跡を附られど
 様お憂目を見んも計られねば晝間の中目星き物を荷籠か暮るを待ち宿み出るに如何ぞ
 やと言ばお養も黙頭て成程和郎の言通り夜に入らば人目も掛らす結句其方がよろから
 んと夫婦互に窃き語り晝の中より脚半草鞋それ〜仕度なしつつも待ば生憎冬の日も長き
 を覺えもどる〜限りある中暮深〜本街道に人目の恐れ然らば是より山越か〜信州にあ
 る知己の方へ立越んとて手は取り宵月の影便りとなく覺束あくも呼子鳥あとい野を越
 山道へ斯る所へ誰とい知を木の間隠れ母打出す銃砲銃音高く飛來る彈の先なる伊三郎の
 助を控と打抜しに何ぞ溜らんキヤツと叫び倒る、体に驚く間もなく餘れる彈丸にお養の乳
 の下のぶるに撃〜是さへも叫び〜其所に倒れたる其時側の樹林を押し分顯れ出る三人の曲

者は則ち別人ならむ手は銃砲を持たるに新志代の山猫三次二人の虎と勘次なり三人の首尾
 能く伊三郎と撃と取〜お養爾笑み立寄見れば這に如何餘れる彈丸にてお養はまで傷を負せ
 し母吃驚し今更何と詮方もあらぬむ三人顔を見合せ茫然と〜たりたり一時の重傷母氣
 を失ひしお養のやう〜心附き見まば三人が居りたる母俯りと計り必附き柳眉を逆立て發
 打と白眼人でなしの權三郎藤三を殺〜飽足て吾儕等までも殺さんぞいはふ様おき人非人
 めと言も苦き息の下三次に見やりてせ〜笑ひ假令人非人であらふが無うらふが生して置
 れぬ本夫の伊三郎藤三母歐れて縁起が惡く戀の就す博奕の負腹おらねど遺恨をば晴さん
 爲は藤三めを昨宵呼出し翫殺〜死骸の沼へ骸さきど殺やと思ひ今日一日隠〜目附附て置
 と勘次が歸つ〜云々と和女の本夫が葬つてやつた事まで聞〜ゆゑ夫で吾儕のし〜業と肝
 づくだらうと思つ〜より今宵の汝等夫婦を呼び出し先伊三郎めをぶつ放〜汝の縛つ〜置
 ありと吾儕の望みを晴した上殺して遣ふと思ふをり夫婦連立出て来〜に此上もあに能い都
 合と木の間隠れ〜打出た其銃砲の強藥汝母迄も及不〜たの惜い物どが詮方がね〜本夫と一
 所は此山の土に成の汝責くもの樂みふして往生しろと嘲弄すまばお養の口惜斯る謀のある

共知ねど昨宵の夢みまぎしく藤三さんが現出て汝が非業の刃に死し夫婦の者へも災禍
が来るといふふ夢の通本夫の用地を尋し所死骸が有り一井つて今宵宿に此所を退んず
とすゆと氣取まき殺さむたるう口惜い然りながら殺さば殺せ我々三人の怨靈に此世母
止り汝等三人阿容く生いて置可きると棺枯聲を張上げて血走る眼も白眼たる其恐一き一方
おらねむ勘次と虎の慄々もの齒の根合であたりたるを物ともせざる山猫三次エ聞たく
もねへ世迷言真途へ行て勝手母言と確と蹴倒し鉄砲を受理と捨て氷おき白刃を抜て乗掛り
咽喉元深く刺し貫けり魂消る聲に此世の別れ眼を見張四肢を悶き虚空を掴んで息絶し惜や
盛りの花の顔夜半の嵐母散り、の憐といふも骨あり三次の血刃押拭ひ鞘に納く此時までも
色青ざめり物も得言ぬ二人の假子状勵し立夫婦の死骸を引起せば未だ其状りも目を眠らむ
白眼をるに手杖放せば三次の猶も叱りながら首筋掴んで兩人が死骸状側の谷底へ控と計よ
放下し込み塵打拂ひ優々と二人引連立歸りぬ不題お養の親の聲娘とえ斯る死を遂し事
との露知を何故突然居ら成しうと夫が行術を尋しも皆暮知ねば困じ果しが遙の後に山猫
三次がお召捕は成たるをり二人を手母掛殺せしを白状なし、は容子が知厚く菩提を拜ひ

たる去程も三次が輩の思ひの儘遺恨を暗し心すがしく成しうと渠等が末期母言た
る事と其形相の恐一さが目先おちらつさ忘れかね何處ともなく薄氣味悪く疑心暗鬼を生を
るてふ世の俚諺よいふ如く怖しと思へば庭お干す白き浴衣も幽霊に見ゆるは全に神経病
互ふ口母の出さききど心の中での朝暮に忘れもやらねば戸お中る夜風の音も驚うされ冷
汗うくも度々ありたり其年もえや暮行り明きば専保九年の正月元日雑煮餅をば祝えんと先
三次とば上坐ふすゑ勘次と虎の下ふ侍し屠蘇散よりと初しが虎の屠蘇をば飲ながら勘次の
顔を見ると等く酒盞確と投出ーヤア汝の昨年殺しと伊三郎未だ成佛としねへのうと言より
早く側なる長脇差を閃りと抜き切り掛れば勘次の吃驚飛退ながら吃度見て汝の織多の藤三
郎殺されくも未だ怨をいふのう憎い奴めと是もまた側の白刃を閃りと抜き立向ひつ、必死
の戦ひ銚子酒盞重詰も蹴散らしたる盃盃狼籍三次の嘔吐と驚きく止めんとするも白刃の下
止め無なる計となるが左右まわるうち兩人の互母深傷淺傷負ひ血に染りままきく戦ひ已
し双方危ふまきは今の三次も見ておられを白刃の中へ分て入と手前にお養う邪魔するま
虎が立蹴に確と蹴る續いて勘次も又お養が並へ来たるの面倒おと白刃を揚て三次が腰一太

刀丁と切々れば何ぞ溜らんキヤツと叫び尻居母控と倒れたり此内二人の切合て共ニ膝をば
 突ながら勘次ハ虎の咽喉元深く差貫ぬけば虎はまた勘次が咽喉がツト通し果し合しく兩
 人とも敢なく息の絶るるハ神経病とい言ながら是將三人の怨靈のあせる所ろか恐ろしきま
 折しも門邊と通り掛る此里人が物音を聞附け何ぞと這入見まば主個ハ腰が切れたま、悶絶
 なるして其所ハ倒れあとの二人ハ差違へ息さへ絶てゐる体ハ其驚きハ一方ならを大聲上り叫
 ぶふなん村の甲乙集り来て先分抱をな、かば三次ハやうく息出く二人ハ体が見え吃驚
 備ハ死靈の業なるると今更吉を巻のみなれど明三人ハ言れぬゆゑ今朝屠蘇散を吞むとり
 如何なせしや虎ハ發狂突然勘次へ砍掛しに此方も夫と拔合せ斯の次第及び行き止めん
 とし傷を負しといふに集合里人も發狂といへば是非あき事と夫等を里の長ハ告げ形の如
 く母兩人ハ死骸ハ葬り得させし後三次ハ醫師を呼迎へ傷の療治あし、のど果敢くしく
 功も見え其時よりしく腰抜と成し耳かハ二人の假子が死たる事ゆゑ誰あつて薬を初め
 この他の世話あるす可き者もなけまば家ハ荒果塵ハ積り其汚き事いん方なく餘所目見
 たる村の者も新志代權三郎と言ま三人ハ勝たは假父なり、が薄命で今の姿よ成まハハ氣の

毒なりと代りく、母發物などを送ると言ども
 此方ハ又焚澤究めく消光身今不自由ハ身軀ハ
 成くハ心頻に焦立のふ且ハ死靈の祟もく夜母
 入る毎ふうなざるれば来る人々ハお養夫婦藤
 三郎母見ゆるより果ハ白刃を引抜く誰ぞも構
 えむ切附る發狂人と成しかば邊の者も大きに
 怖き誰ぞ近附者なきふぞ三次ハいよく狂
 ひ廻り三人ハ事を言晋り荒散してハ發物あき
 小障子の紙など發初身体次第に瘦衰へ眼窪み
 て恐しき形相とて非成なれば四邊の者ハ此家
 を差す化物屋敷と唱へつ、噂ハいと高うり
 たり茲ハまた大岡忠相ぬしハ雲霧の一統詮義
 の爲と養母ハ仲團右衛門を出しやりしが又本



郷の人殺し嶋屋が家の一事附き其節跡を失ひたる因果小僧の六之助と刑走熊五郎が行衛
 詮幾としく石子傳作二人の組子を屬て江戸は出いやるに傳作の心得と奥州筋へ差掛り
 行々て越後國玉井村の邊へ来一に並より新志代權三郎の評判高く今茲正月元日に簡様く
 の事ありしが夫より心の狂行さ簡様を口走るとお養夫婦藤三がこと又三人も其前より
 行衛知むに成さゆゑ設や然てあるまいと皆喋々する話を聞き石子の怪有なる事と思ひ
 權三郎といふ者の人相骨柄聞合するに達磨の長次が白狀せし山猫三次の能く似たれば再度
 出所を問たるに元此村の生息ふく功名を三次郎といひ久しく何に在しか知ねど三年以前母
 立歸り新志代權三郎が養子とあり跡目を纏て云々と語るよいよく夫と知り組子を従へ傳
 作の新志代の家へ至るに半年餘を誰あつて構ひもせざる事あれば軒端傾き壁落て聞し優
 る荒といひ主個の身軀は古木の如く瘦衰へま此世の人とも思えれぬまで成行しが夫と見る
 より莞爾ふ是は大岡様の御家諱衆能く養米を給ひたまは此新志代權三郎といふの賢雲霧が屬
 下みて山猫三次と言ふ者箇様くの諱あつて伊三郎夫婦藤三まで非道の刃ふ殺せしと残り
 ず鏡舌忽然と悶絶おしく死したるは是えた怨靈の所意あるると石子は舌を巻るが用捨あ

らせむ組子よ吩咐先三次をば縛り上後に藥を吞する母彼方の漸々息吹返し初夢の覺たる
 如く茫然として四邊を見たりぬ登時石子傳作の膝伏進み三次に向ひ吾儕は江戸町奉行大岡
 越前守の家隸石子傳作と稱者あるが汝等が全類ある達磨の長次を己母召捕次で五人を縛せ
 ん爲諸國を巡る其中に汝が事を知るかば今此所へ向ひたり就ては三次といふ事よりお養夫
 婦藤三郎を殺せし事を汝の口より言たるままで今一應茲にてやせと嚴重に宣告されて吃驚
 し備に死靈の祟に悪事を残を白狀せしかと正氣附く今更に驚くの外あらざれど又執言
 べき由もなけまば包を中し述母たり依て石子の村長を呼寄之が守をさせ所の領主も届け置
 網乗物状構造く夫も打乗三次をば江戸表へと護送おしたり夫の備置は又因果小僧六之助
 一引列きたる洲走の熊五郎の面体變本郷嶋屋の家を立出盜し金を路用となし先奥州の松嶋
 を一見せむやと中仙道へ掛て其夜の怪げなる白屋泊と求め翌日ひた走に走る程武州
 深谷と本庄の合の宿ある高柳と稱る所まで来掛しが折しも秋の空の痺瀾と降出す俄雨素よ
 り雨具の用意なれば濡たる儘に道を行但みまば側母些少なる居酒屋あるお打喜び這入ら
 其所の主個と云ふ年齢五十有餘なる婦女で有りて田舎の事一個住やら夫と見く能くお出

なさきまゝした照らし雨でお困りあらん見ればお單も濡た容子と言ふ此方の會釋して刃を脱
 捨れば女主人の採側の棹へ掛る間お熊五郎の色より着代浴衣を取出一早くも夫を纏ひたり
 免角する中煮添ふ添ふ酒さへ出すは飲あがら心ともなく興の間と見れば老婆の娘もや年齒
 廿二三お成る田舎にいくの珍しき美女とも言可き一人の女茶車を取取らぬたるお素より色
 好みの熊五郎一目見るより戀風うち女計の此世帯事主の留守り乃至又有ぬり知ねど何道と
 も今宵の茲へ一泊してアノ娘をば手に入んと思ひ續く老婆母向ひモシ母親今日も彼是七つ
 過雨のますく降くる来る本庄迄の餘程ある母雨具もなしで行れぬから何卒留て下さ
 るめへりと言は老婆の氣の毒さうよか一人位をお留すの何より安い事なれど宿屋の非ぬ
 合の宿素人屋母もお客を留ると兩方の驛の宿屋のらやうましく掛合込ツイ此間も近所よく
 判を取りき託入た人がある故お留す事如何しても出来ませんが雨の止まで緩慢と休ん
 でお出被爲の御勝手なれば然あされ其中戻りの竹輿でも參らば安く談じて上まするは然
 る本庄迄お出あさいと世辭のあれども田舎堅氣土地の究と言立て留る景状の有ざるに洲走
 茲に望を失ひ夫で少し止間緩慢させて下せへと言より外のあうりたり